

《卒業研究報告》

コーヒー産業の闇 — 貧困と不平等の現実 —

木村 海斗 (鵜沢ゼミ)

序章 本論文の問題意識と目的

コーヒーを一杯飲む。現代社会では当たり前のことである。望めば、様々な場所で手に入る安価な飲み物であり、そういった印象が強いのではないだろうか。消費者側の立場にいる私たちが暮らす日本は、世界的には先進国に分類される。そして、そのコーヒーの生産者側の立場にある国々の多くは、中南米やアフリカの発展途上国に分類されている。つまり、日本でコーヒーを飲むためには、これらの発展途上国との貿易が必要であり、コーヒーが飲み物として形になるまでには、様々な工程が存在する。そのすべての工程を通してやっと出来上がるコーヒーが、コンビニでは約120円、一般的なカフェでは約400円で購入できるのである。それはなぜだろうか。こんなにも多くの工程を経て、さらに他国とのやり取りがあるにもかかわらず、なぜコーヒーはこれほど安価に手に入るのだろうか。

本稿では、コーヒーの起源から紐解き、途上国との輸入取引の現状、フェアトレード制度による取引について、コーヒー豆生産量上位5カ国を中心に、経済的格差や途上国の労働環境について分析し考察を行う。

第1章ではコーヒー豆生産国上位5カ国の歴史や文化を詳しく掘り下げ、各国の特徴をまとめる。第2章ではコーヒー豆の生産地である発展途上国ではどのような環境で生産が行われ、取引を行っているのかを論じる。第3章では、SDGs、フェアトレードがコーヒー豆の生産に与えている影響

について詳しく考察する。

第1章 コーヒー豆生産主要国の歴史と文化

コーヒーについて論じるうえで、その起源と歴史に関する知識は欠かせない。本章では、コーヒー豆生産が盛んな上位5カ国におけるコーヒーの起源とその伝来について考察する。コーヒー生産量に関するデータは、World Population Reviewの「Coffee Producing Countries」(図表1)に基づき、以下の5カ国を挙げる。具体的には、歴史的文化的なエチオピア、世界1位の生産量を誇るブラジル、以下3カ国ベトナム、コロンビア、インドネシアである。

第1節 エチオピアのコーヒー伝説と起源

第1項 コーヒーの原産国としてのエチオピア

初めに、コーヒーの起源国であるエチオピアに触れる。コーヒーの生産に欠かせない原木が発見された場所はこのエチオピアという国であり、その起源には宗教と強いつながりがある。岩切正介によると、「世界で飲まれることになるコーヒーの原木があったのは、イエメンの対岸の国エチオピアである。この種は後に植物学者リンネによってアラビカ種¹と命名される」(岩切 1998:24)と記されている。エチオピアという国は現在でもコーヒー豆の生産が盛んな国であり、日本で販売されているブレンドコーヒーには多くの場合エチオピア産のコーヒー豆が使用されている。加えて、エチオピアのコーヒーには多くの逸話が存在して

COUNTRY	2023-24 COFFEE PRODUCTION (60KG BAGS)▼
Brazil	66,300
Vietnam	27,500
Colombia	11,500
Indonesia	9,700
Ethiopia	8,350
Uganda	6,850
Honduras	6,500
India	5,950
Peru	4,200
Mexico	4,090

Coffee Producing Countries 2024 (図表1)
(World Population Review 「Coffee Producing Countries 2024」 2024年8月26日アクセス)

いる。ここではその中でも特に有名な2つを紹介する。なお、1つ目の伝説として紹介するシーク・オマールの伝説はエチオピア発祥の伝説ではないが、コーヒーの歴史を知る上で欠かせない情報であることから記載する。

キーコーヒー株式会社のホームページには、以下のことが記されている。

シーク・オマールの伝説 [イエメン・オウサブ]²
イスラム教の聖職者シーク・オマールは、疫病が流行っていたモカの町で、祈禱を捧げ、多くの人の病気を癒していました。ある時、モカ王の娘が病気にかかり、オマールが祈禱を捧げたところ病気は治りましたが、美しい娘に恋をしたオマールはオウサブという山中に追放されてしまったの

です。

洞窟で暮らし、食べ物も満足になかったオマールはある日、美しい羽根を持った小鳥が木に止まり、陽気にさえずるのを見ました。そして、手を伸ばした木の枝先には赤い実がついていました。空腹だったオマールが、その実を口にしたら、たいそう美味でした。彼はたくさんの実を洞窟へ持ち帰り、スープをつくりました。

それを飲むとたちまち爽快な気分になりました。その後、オマールの見つけたこの不思議な飲み物の噂は町へ伝わり、オマールは町へ戻ることを許されました。

カルディの伝説 [エチオピア・アビシニア高原]
アラビア人のカルディという山羊飼いはエチオピアの草原で放牧生活をしていました。ある日、

1. 19世紀以降アラビカ種に加えて、ロブスタ種とリベリカ種が発見された (岩切 1998:24)。

2. [イエメン・オウサブ] [エチオピア・アビシニア高原] とはこの伝説が語られた発祥の地の [国名・地域名] である。

気がつくと、自分の山羊が楽しそうに飛んだり跳ねたりしています。そこで調べてみると、あたりに茂っている木になった真っ赤な実を食べていることがわかりました。

そこで自分も食べてみると、とても爽快な気分になります。カルディは山羊と一緒に毎日この赤い実を食べ、元気に楽しく働いていました。

あるとき、通りかかったイスラム教の僧侶がカルディたちの様子を見て赤い実の不思議な力にびっくりし、これを僧院に持ち帰り、仲間の僧侶たちにも食べさせたところ、甘ずっぱいおいしさに加えて、眠気がとれ爽やかな気分になりました。それ以来みんなすっかり魅せられ、魔法の豆として、密かに愛用されるようになったということです。

コーヒーの生い立ちを伝える話は、このほかにも沢山ありますが、どうやら最初はイスラム教の僧侶の眠気ざましの妙薬として広まったようです。また、今からおよそ1千年ほど前、アラビアの都バグダットの王立病院長だったラーゼスという人は、「古来、エチオピアに原生していた灌木、バンの種実(豆)を砕いて煎出した汁液バンカムは、一種の薬として胃に良い」と書き残しています。バンはコーヒーの豆のことですが、当時は薬として、とても珍重されていたんですね。

(キーコーヒー株式会社「コーヒーを知る」2024年8月18日アクセス)。

以上のことがキーコーヒーのHPに掲載されている。どちらの逸話にもイスラム教徒の僧侶とコーヒーが書かれていることから、ただの嗜好品として扱われているわけではなく、文化や思想とも繋がりがあることが分かる。

第2項 エチオピアの伝統的なコーヒーの作り方

長い歴史を持ち伝統文化としてコーヒーを扱ってきたエチオピアであるが、コーヒーの作り方、扱いにも特徴がある。エチオピアでは客人にコーヒーを出す行為に意味を持っている。文化人類学や北東アフリカ地域研究を行っている石原美奈子によると、「エチオピアはどこに行ってもコーヒーで接待され、隣近所同士のつきあいの場では必ずコーヒーが振る舞われる。エチオピア政府は『コーヒー発祥の地』を観光のPRとして用いており、観光客が訪れるホテルやレストランでは必ずと言っていいほど『コーヒー・セレモニー³』が行われる。」(石原 2013:150)と記されている。コーヒー・セレモニーとは、コーヒー豆を炭火で煎ることから始まり、コーヒー・ポット(jābāna)で粉末にしたコーヒーを煮立て、客に振る舞うまでの一連の所作をさす。この一連の所作は、視覚・嗅覚・聴覚・味覚に働きかける洗練された動作を要件としてなりたつ芸術的行為である(石原 2013:150)。このことからエチオピアでは、コーヒーというものが一つの文化として扱われていることが示唆される。

加えて、コーヒーの淹れ方にもエチオピア特有の作法がある。エチオピアでは「ジャバナ」と呼ばれる素焼きのコーヒーポッドを利用してコーヒーを抽出するという(東日本コーヒー商工組合「エチオピアコーヒーの特長とは?伝統的なコーヒー・セレモニーも紹介」2024年9月3日アクセス)。

以下がエチオピア式の抽出方法である

まずジャバナに水を入れ、沸騰させましょう。

3.カリオモン・コーヒー・セレモニーの別称。「カリオモンには『コーヒーと一緒に楽しむ仲間』という意味があり、ポットやカップなど、カリオモンで使う茶器は、代々受け継がれることもあるようです。」(東日本コーヒー商工組合「エチオピアコーヒーの特長とは?伝統的なコーヒー・セレモニーも紹介」2024年9月3日アクセス)という。

沸騰したら火を止め、コーヒー粉を入れます。ふたをせず、4～5分ほど弱火で煮出しましょう。4～5分ほどしたら火を止め、ジャバナを傾けてコーヒー粉を沈めます。

コーヒー粉が沈んだら、カップにお好みで砂糖を2gほどくわえ、少し高いところからコーヒーを注ぎましょう。カップにコーヒー粉が入りにくくなります。コーヒーを注ぎ終えたら、エチオピア式コーヒーの完成です。(東日本コーヒー商工組合「エチオピアコーヒーの特長とは? 伝統的なコーヒーセレモニーも紹介」2024年9月3日アクセス)。

これに対して、日本や欧米ではペーパードリッ プ方式が採用されている。ペーパードリッ プ方式とは、ペーパーフィルターを使ってお湯をコーヒー粉の上からゆっくり注ぐことで、抽出を行う方法である。このように、同じコーヒーであっても国によって淹れ方が大きく異なり、コーヒーが人々の生活に与える影響は非常に大きいことが分かる。

第2節 ブラジルのコーヒーの起源

本節ではブラジルのコーヒー起源について触れていく。ブラジルは現在コーヒー豆生産国として1位を誇っており、日本で売られているコーヒー豆の多くにブラジルの豆が使用されている。

第1項 ブラジルにおけるコーヒーの伝来

ブラジルにはコーヒーの原木は自生しておらず、コーヒーの歴史が始まった要因は他国からコーヒーの木が持ち込まれたためである。UCCコーヒーによると、「ブラジルのコーヒーは、1727年にポルトガル海軍士官によってフランス領ギアナから持ち込まれたといわれます。」(UCCコーヒー「コーヒー生産量世界一の『ブラジル』

ーコーヒーベルト・コレクション」2024年9月6日アクセス)という。また、生産量が世界1位になったのは1850年であり、その背景には150万人に及ぶ奴隷労働が大きく関係している(東日本コーヒー商工組合「エチオピアコーヒーの特長とは? 伝統的なコーヒーセレモニーも紹介」2024年9月3日アクセス)。しかし、19世紀後半に奴隷制度が廃止された。これを受けブラジルは移民の受け入れを始め、賃金労働として雇うことでコーヒー栽培を続けている(UCCコーヒー「コーヒー生産量世界一の『ブラジル』ーコーヒーベルト・コレクション」2024年9月6日アクセス)。以上のことから、ブラジルが生産量世界1位を誇る背景には奴隷労働時代から培ってきた人手を多大に要する生産形態が関係していることが推察できる。

第2項 コーヒー産業の発展と世界最大生産国としての地位

前節では伝来から生産量1位を誇る背景について触れたが、ブラジルが発展した理由は数多く存在する。外務省の調査によると、国土面積が「851.2万平方キロメートル(日本の22.5倍)」であり、世界で5番目にあたる大きさを誇る(外務省「ブラジル連邦共和国(Federative Republic of Brazil)基礎データ」2024年8月30日アクセス)。加えて、国土の大半がコーヒーベルトに属している。コーヒーベルトとは、南北緯約25度の一帯のことを呼ぶ。コーヒー生産が盛んな国の多くがこの一帯に位置しており、ベルトのように並んでいることからコーヒーベルトと呼ばれている(図表2)。

さらに、広大な土地と環境を最大限に生かすために生産技術への取り組みを行っている。第1章で提示したデータでも分かる通り、ブラジルは他国と比較しても圧倒的な生産量を誇っているが、土地と環境、労働力が揃っていても限界がある。

その問題に対して、ブラジルは大規模なプランテーション栽培を行っている。プランテーション栽培とは、熱帯農業を研究している佐藤孝によると、「大きな資本を投下して作物の栽培、収穫物の調製のための工場運営、貯蔵、輸送、販売までを一貫した組織のもとで行う一種の企業である。」(佐藤 1972:39)と記している。このプランテーション栽培を用いることで収穫量を大幅に増やしている。しかし、ブラジルのプランテーション栽培には現在2050年問題と呼ばれる問題がある。

2050年問題とはキーコーヒー株式会社によると、地球温暖化の影響によってコーヒーの木がさび病や虫の影響を受け、収穫量が大きく低下する可能性がある問題のことだ(キーコーヒー株式会社「コーヒーの2050年問題」2024年8月14日アクセス)。この問題はブラジルが行うプランテーション栽培と関係性が深く、栽培面積拡大の際に生じる森林伐採が影響を及ぼしている。自然電力株式会社の調査によると、次のような問題点が挙げられている「熱帯林をプランテーション化することによる気候変動への影響で、とりわけ泥炭湿地林のプランテーション化による環境への負荷が指摘されています。」「泥炭湿地林には土中のCO₂の

約1/3が蓄積されています。」「泥炭湿地林の伐採によりCO₂が大気中に排出され、温暖化の加速に繋がることが懸念されています。」(自然電力株式会社「コーヒーを飲む時に考えてみよう その一杯の背景にある熱帯林の消失・農家の貧困とSDGs」2024年8月14日アクセス)。このプランテーション化による悪影響はブラジルだけに留まらない。地球温暖化は世界全体に影響のある環境問題のため、プランテーション化を行っていない小規模農家にも影響を及ぼす。このことから、コーヒー収穫量を増やすためにブラジルが単独でプランテーション化を行うと、コーヒー市場全体の寿命を縮め、2050年問題を加速させてしまうと推察できる。

以上のことから、今後も需要が高まっていくコーヒーに対して、環境保護と大量生産の両方を実現する取り組みが必要になってくるだろう。

第3節 その他の主要生産国の歴史と文化

前節ではコーヒー発祥の国としてのエチオピアと、生産量世界一を誇る国としてのブラジルを詳しく論じたが、本節では生産量の多いその他3カ国について論ずる。



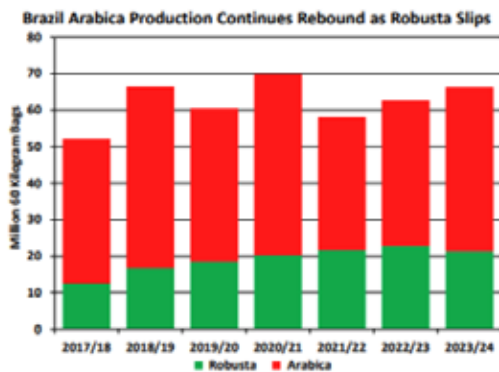
図表2 コーヒーベルト (全日本コーヒー協会「コーヒーの基礎知識」2024年8月14日アクセス)

第1項 ベトナムのコーヒーの特徴と飲み方

ベトナムのコーヒーの特徴は主に3点挙げられる。1点目が使用している豆がロブスタ種であることだ。前節で紹介したエチオピアやブラジルで主に生産されている豆はアラビカ種であり、ロブスタ種の生産量は少ない⁴ (図表3)。

これに対し、ベトナムではロブスタ種が95%、アラビカ種が5%の比率で栽培を行っており、コーヒー生産量自体も世界2位を誇っている(珈琲豆専門店-YABU COFFEE「ベトナム アラビカコンテンツ1位」2024年10月4日アクセス)。

2点目の特徴が、「カフェ・フィン」と呼ばれるフィルターで抽出を行うことである。「カフェ・フィン」とは、金属製のドリッパーであり、圧縮したコーヒー粉の中にお湯を落として抽出を行う(キーコーヒー「ベトナムコーヒーはどんな味? 特長やいれ方を解説」2024年10月4日アクセス)。特徴としては、目の細かい圧縮した豆に対して、お湯がゆっくりと落ちていく構造のため、濃いコーヒーが抽出されることである(図表4)。



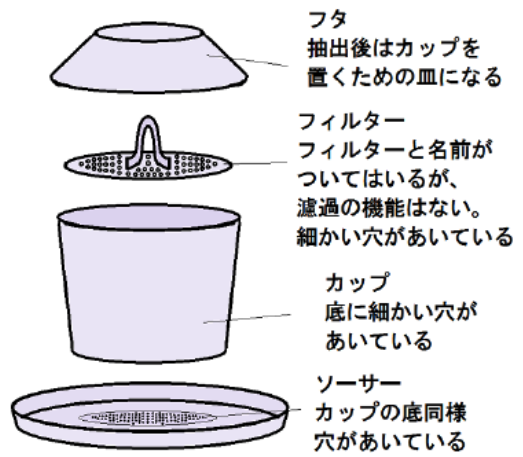
図表3 Brazil Arabica Production Continues Rebound as Slips (USDA 2023:2)

3点目の特徴が、コンデンスミルクを入れることである。ロブスタ種の特徴として、アラビカ種よりも苦みが強く、ブラックコーヒーとして飲むには適していないという(キーコーヒー「ベトナムコーヒーはどんな味? 特長やいれ方を解説」2024年10月4日アクセス)。

加えて、カフェ・フィンの特徴から、通常よりも濃く苦いコーヒーが抽出されるため、コンデンスミルクを入れて飲む形がベトナムコーヒーとして普及した(キーコーヒー「ベトナムコーヒーはどんな味? 特長やいれ方を解説」2024年10月4日アクセス)。このような他国とは違う形を用いてコーヒー文化を確立したベトナムであるが、アラビカ種ではなくロブスタ種を栽培している理由は、ベトナムの気候が関係している。

キーコーヒー株式会社によると、「ベトナムでコーヒー栽培が始まった当初はアラビカ種を導入していましたが、ベトナムの気候に合わず、うま

カフェ・フィン



図表4 (カフェ・フィン珈琲タイム「カフェ・フィン」2024年10月4日アクセス)

4. ブラジルで生産されている豆「ブラジルで生産されるコーヒー豆は、約7割がアラビカ種でブルボン、カトゥーラ、カトゥアイ、ムンドノーボといったブルボン系の栽培品種が主に栽培されています。残りの約3割はコニロンと呼ばれるカネフォラ種(ロブスタ)です。」(東日本コーヒー商工組合「エチオピアコーヒーの特長とは? 伝統的なコーヒーセレモニーも紹介」2024年9月3日アクセス)。

く栽培を広めることができませんでした。その後、ベトナムがフランス領になった際にロブスタ種が持ち込まれました。ロブスタ種のコーヒー豆はベトナムの気候と相性がよかったことから、ベトナムでのコーヒー豆の栽培が広まっていったのです。」と記している（キーコーヒー「ベトナムコーヒーはどんな味？特長やいれ方を解説」2024年10月4日アクセス）。この特徴から、ほとんどの生産をロブスタ種へ変更したことにより、現在の生産国2位というベトナムの地位があることが考えられる。

第2項 コロンビアの高品質アラビカ種とスペシャルティコーヒー

コロンビアもコーヒー豆生産国として有名な国であるが、他国とは違った特徴がある。コーヒー豆研究所によると、コロンビアコーヒーの起源は、1730年～32年頃とされており、「東部タバハにある『サンタ・テレサ』のキリスト教修道院に植えられたコーヒーの木から始まったともされています。」（コーヒー豆研究所「コロンビアコーヒーの特徴とは？豆の品種から美味しい飲み方まで解説」2024年10月4日アクセス）とされている。コーヒー豆を栽培するのに適した環境が整っており、その特徴として1年間通してコーヒー豆の収穫が

出来る。加えて、2011年に「コロンビアのコーヒー産地の文化的景観」として地域まるごと『世界文化遺産』（コーヒー豆研究所「コロンビアコーヒーの特徴とは？豆の品種から美味しい飲み方まで解説」2024年10月4日アクセス）に登録されており、生産に加えて環境や伝統ごと有名な国であることが分かる。

コロンビアのコーヒー豆は文化だけではなく、品質にもこだわりがある。扱っている品種はエチオピア原産のアラビカ種であるが、「コロンビアコーヒー生産者連合会（FNC）」（コーヒー豆研究所「コロンビアコーヒーの特徴とは？豆の品種から美味しい飲み方まで解説」2024年10月4日アクセス）を元に高品質なコーヒー豆の生産に取り組んでいる。

以下がコロンビアにおける豆の等級を示したものである（図表5）。

ここにあるスクリーンというの豆のサイズであり、この数値が高いほど等級が高く、「スクリーンサイズが16以上&カラコル」だけがスペシャルティコーヒーとされ取引されます。」（コーヒー豆研究所「コロンビアコーヒーの特徴とは？豆の品種から美味しい飲み方まで解説」2024年10月4日アクセス）と記載されている。

このことからコロンビアのコーヒー豆は大量生産大量輸出だけではなく、品質にこだわった生産

等級	スクリーンサイズ
エクセルソ プレミアム	18
エクセルソ スプレモ	17
エクセルソ マラゴジッペ	17
エクセルソ エクストラ	16
エクセルソ カラコル	12
エクセルソ ヨーロッパ	15
エクセルソ UGQ	全体の半数以上が15、残りは14

図表5 コーヒー豆のスクリーンサイズ（コーヒー豆研究所「コロンビアコーヒーの特徴とは？豆の品種から美味しい飲み方まで解説」2024年10月4日アクセス）

を行っていることが推考できる。

第3項 インドネシアのコーヒー生産の歴史と特色

インドネシアはベトナムと同じくロブスタ種の生産が盛んである。ベトナムとの大きな違いは、数少ないアラビカ種の生産において栽培地によって銘柄が変わり、コロンビアのように品質にこだわりを持っていることだ。インドネシアの銘柄は主に7つある（図表6）（大社珈琲「インドネシアコーヒー豆の特徴 | 歴史・主な産地や豆の種類も」2024年10月4日アクセス）。

この中でも特に有名な銘柄はマンデリンである。マンデリンの歴史は、コーヒー鑑定士の松本安弘によると、「インドネシアコーヒーのマンデリンは元々スマトラ島の部族『マンデリン族』から付けられた名前です。」（COFFEE ROASTERY 101、松本安弘「インドネシアで生産されているコーヒー豆の特徴とは」2024年10月4日アクセス）と語られており、1世紀にオランダ軍がアラビカ種をジャワ島に持ち込んだことから始まったとい

う。また、コロンビアのブランド豆のように、コーヒー豆の品質の等級分けがインドネシアにも存在する（図表7）。

このこだわりから選ばれたものが高品質豆として扱われ、世界で愛されている。

第2章 コーヒー豆生産主要国の労働環境

前章では生産国上位5カ国におけるコーヒー豆の特徴やコーヒー生産の背景について論じた。本章ではその労働環境について掘り下げて論じる。

第1節 途上国の経済状況とコーヒー産業

コーヒー豆は発展途上国で作られているという話題は広く知られているだろう。本節では、発展途上国の概要についてより深く論じる。

第1項 発展途上国とは

ここではまず、発展途上国に当てはまる国の特徴をまとめる。発展途上国とは、「開発途上国とは、先進国と比較して経済水準や発展段階が低い国々のことです。」（朝日新聞「開発途上国とは？ 定

種類・銘柄	栽培地	品種	特徴
ジャワコーヒー (ジャワロブスタ)	ジャワ島	ロブスタ種	香りと苦み・コクがあり、酸味が少ないのが特徴。 カフェインが多く含まれる品種です。
マンデリン	スマトラ島	アラビカ種	苦みと深いコクが特徴。酸味は少ないです。 コクがあるのでカフェオレにぴったり！
ガヨ・マウンテン	スマトラ島 ガヨ高地	アラビカ種	香りとコクが強いのが特徴。まろやかな風味で飲みやすい品種です。
バリ・アラビカ	バリ島	アラビカ種	香りが良く苦みがあるのが特徴です。
トラジャコーヒー	スラウェシ島 トラジャ地方	アラビカ種	コクと苦み、酸味と甘みのバランスがよいのが特徴です。
キンタマーニコーヒー	バリ島	アラビカ種	フルーティな香りが特徴。
ジャコウネココーヒー (コピ・ルアク)	各地	アラビカ種 ロブスタ種	ジャコウネコの排せつ物の中の未消化の コーヒー豆からできるコーヒー。 香りや風味がすばらしく、世界で最も高 価なコーヒーと言われていました。

図表6 インドネシア豆 銘柄一覧（大社珈琲「インドネシアコーヒー豆の特徴 | 歴史・主な産地や豆の種類も」2024年10月4日アクセス）

義や一覧、解決すべき問題や日本の支援事例を解説』2024年10月11日アクセス)とされている。この発展途上国には明確な定義はないが、「開発途上国は経済協力開発機構(OECD)が定める被援助国・地域リストに入っている国々のことを指しています。」(朝日新聞「開発途上国とは? 定義や一覧、解決すべき問題や日本の支援事例を解説」2024年10月11日アクセス)と記されていることから、大まかな基準の中で分類されている。

対して、外務省が定めた発展途上国の中でもさらに開発が遅れている途上国である後発発展途上国の定義は「国連開発計画委員会(CDP)が認定した基準に基づき、国連経済社会理事会の審議を経て、国連総会の決議により認定された特に開発の遅れた国々。3年に一度LDCリストの見直しが行われる。」(外務省「後発開発途上国(LDC: Least Developed Country)」2024年10月11日アクセス)としている。ここに記されるLDCとは、Least Developed Countryの略語であり、日本語にすると後発開発途上国という意味になる。

また、国連開発計画委員会がLDCとして認定する国の基準を以下のように定めている。

基準 (2024)

以下3つの基準を満たした国がLDCと認定される。ただし、当該国の同意が前提となる。

(1) 一人あたりGNI(3年間平均): 1,088米ドル以下

(2) HAI (Human Assets Index): 60以下

(注) 人的資源開発の程度を表すために国連開発政策委員会(Committee for Development Policy: CDP)が設定した指標で、5歳以下の乳幼児死亡率、母体死亡率、発育阻害の蔓延度、中等教育就学率、成人識字率、中等教育におけるジェンダー平等度を指標化したもの。

(3) EVI (Economic Vulnerability Index): 36以上

(注) 経済的脆弱度を表すためにCDPが設定した指標で、GDPに占める農林水産業の割合、地理的制約、商品輸出の集中度、財及びサービス輸出の不安定性、低標高沿岸地帯に住む人口の割合、乾燥地に住む人口の割合、農産物の生産不安定性、自然災害における被害の大きさを指標化したもの。

(外務省「後発開発途上国(LDC: Least Developed Country)」2024年10月11日アクセス)。

このデータを日本と比較すると、(1)のGNIは日本平均が約4万ドル(World bank group「GNI per capita (constant LCU) - Japan」2024年10月11日アクセス)、(2)(3)に関して日本の詳しい数値は公開されていないが、義務教育としてほとん

0~11個	G1 その中でも特に良い品質のものは「SPGI」に分類されます
12~25個	G2
26~44個	G3
45~80個	G4
81~150個	G5
151~225個	G6

図表7 インドネシア豆 品質一覧(大社珈琲「インドネシアコーヒー豆の特徴 | 歴史・主な産地や豆の種類も」2024年10月4日アクセス)

どの人が学校へ通える環境や、産業の現状を見ると、後発発展途上国とは大きな差があることが分かる。

本稿でテーマとしている5カ国は全て一般的に発展途上国であるとされている国々であるが、発展途上国の中にも経済状況によってクラス分けがされている。そのクラスは主に3つあり「低所得国（1135ドル以下）」「低中所得国（1136～4465ドル）」「高中所得国（4466～13845ドル）」（朝日新聞「開発途上国とは？ 定義や一覧、解決すべき問題や日本の支援事例を解説」2024年10月11日アクセス）と分けられる。ここに5カ国を分けると、低所得国がエチオピア、低中所得国がベトナム、インドネシア、高中所得国がブラジル、コロンビアになる。その中でもエチオピアは後発発展途上国にあたる国であることから、経済的に発展が困難な国であることが分かる。

第2項 1次産業に依存する理由

ここまで論じた各国のコーヒー豆栽培は、いずれも1次産業に分類される。1次産業とは、野菜や果物を生産し、そのままの商品を販売することである。日本の事例を挙げると、農家が野菜を生産し、スーパーや直売所に出荷することがこれに該当する。これを途上国に当てはめた場合、コーヒー豆の生産および他国への出荷が1次産業に該当する。平成18年度外務省第三者評価によると、「農業・農村開発分野は世界の開発において重要な課題であり、経済的、社会的にさまざまな機能を持つが、その意義は途上国では特に大きい。経済的には、農業は多数の途上国の基幹産業であり、平均して途上国のGDPの12%に達し、労働人口の54%を占める。」（外務省 2006:10）とある。

これほどまでに1次産業が密接に関係している理由として、植民地支配の歴史が深く関係している。ボランティアプラットフォームによると、先進国であった欧米諸国が広い国土と環境が整った

場所を植民地とし、自国にとって有益となる作物を栽培、輸出を行っていたという。この仕組みをプランテーション農業という（ボランティアプラットフォーム「プランテーション」2024年10月11日アクセス）。コーヒー豆生産数で一位を誇っているブラジルもこのプランテーション農業を行っており、コーヒーで世界を救うという情報サイトによると、「偶然、1500年にポルトガル人がブラジルを発見し、ブラジルの一部は条約締結の際に南北に引いた線の東側に掛かっていたと言う事なのです。それ故にブラジルはポルトガル領となりました。そこで発展したのがプランテーション農業というわけです。」（コーヒーで世界を救う「植民地の背景」2024年10月11日アクセス）とある。このような歴史的背景から、途上国における1次産業の発展には、植民地時代に形成された経済構造が大きく影響していると推察できる。

さらに、プランテーション農業は多くの場合、モノカルチャー経済という仕組みに基づいている。モノカルチャー経済とは、特定の商品や資源に特化した経済体制を指す。コーヒー豆を例に挙げると、第1章で述べたように、コーヒー豆生産上位5カ国は貿易の大部分をコーヒー生産に依存している。強みを活かした生産は一見して合理的に見えるが、リスクも大きい。東京大学の小宮山涼一による研究では、モノカルチャー経済のリスクとして「ジャガイモ飢饉」としてモノカルチャー経済に失敗したアイルランドの事例が書かれている。その内容は「『ジャガイモ飢饉』も大きな教訓である。アイルランドは、寒冷な気候で小麦等の栽培が困難であった所、ジャガイモが食生活の主役となったが、疫病の影響でジャガイモの単一栽培が壊滅し、数年にわたる大飢饉となった。」（小宮 2023:148）とされている。このように、地域環境の変化や疫病の流行により経済基盤が崩壊するリスクが存在することも課題として指摘される。

植民地支配という背景や、モノカルチャー経済の仕組みから問題点も多々挙げられるが、プランテーション農業は途上国にとって重要な外貨獲得の手段であり、他国との貿易において欠かせない役割を果たしている。

第2節 コーヒー生産と共に増幅する課題

第1項 各国のコーヒー農園の経済現状

上位5カ国のコーヒー豆生産国は、ランキングの通り、毎年大量のコーヒー豆を輸出している。その大量生産の裏には低賃金労働と不平等取引の現実がある。コロンビアを例に挙げると、同国のコーヒー農園の景観はユネスコ世界遺産に登録されており、品質にこだわった栽培が行われているため、一見すると優れた環境下での生産が進められているように見える。しかし、東洋新聞によると、「最大の生産地ウイラ県では多くの生産農家が破綻状態にあるという。生産をやめてその土地を売却するのか、あるいは違法なコカの栽培に従事するのか選択を迫られている。」(白石和幸、東洋新聞「日本人が知らない「コーヒー」生産農家の悲哀」2024年10月12日アクセス)と記されている。加えて、コロンビアで生産された豆のコーヒー1杯分の値段は大体0.02ドルとされており、現状コーヒー農家は赤字が増え続けているという(白石和幸、東洋新聞「日本人が知らない「コーヒー」生産農家の悲哀」2024年10月12日アクセス)。このように低コストで生産を余儀なくされている原因の1つとして、ブラジルが決めた価格設定が影響を及ぼしている。田中優衣の研究によると、「コーヒーの取引価格の基準となる NY 先物市場における国際価格は、農民の生活や栽培環境、農民の声とは一切関係なく、世界全体での生産量の予測と在庫量、そして投資家による投資活動の影響を受けて決められる。その上、世界の総生産量の3分の1はブラジル産であることから、国際価格はブラジルの収量に左右されてしまう」(田中

2014:14) ことが示されており、ブラジルの収量によって影響を受ける国々が多く存在することが分かる。

この現状から、単価が安く儲けを得るには大量生産が必要であるが、大量生産を行うほどの人手が無く、過酷な環境で長時間の労働が強いられている。さらに、コーヒー生産大国に見られる特徴であるモノカルチャーの仕組みによって、他作物の栽培に切り替えることも難しい。

第2項 農園拡大と共に進行する環境問題

前項でコーヒー豆価格の現状と、大量生産の必要性を論じたが、環境問題にも目を向けなければならない。ブラジルではコーヒーを大量生産するためにプランテーション化を進めているが、大きな農園を作る際に行われるのが森林伐採だ。その面積は年間で600万ヘクタールと言われており、その広さは北海道の面積の77%である(自然電力株式会社「コーヒーを飲む時に考えてみよう その一杯の背景にある熱帯林の消失・農家の貧困とSDGs」2024年8月14日アクセス)。この活動によって地球温暖化の促進だけではなく、プランテーション化を行った森林に生息していた哺乳類、爬虫類、鳥類などの生物が8割以上減少するとされている(環境イノベーション情報機構「生物多様性(第16回)『一杯のコーヒーから考える生物多様性』」2024年10月19日アクセス)。

また、コーヒー生産自体をやめるという選択肢もあるが、環境イノベーション情報機構によると「コーヒーの生産をやめれば環境や生物多様性の保全につながると短絡する人もいますがコーヒー価格の急落などによって実際にコーヒー農園が閉鎖されてしまうと、農園の雇用で暮らしを立てていた地域住民が生活に窮して周囲の森林を違法に伐採して開墾するなど、非持続的な行動をとることもあります。」(環境イノベーション情報機構「生物多様性(第16回)『一杯のコーヒーから考える

生物多様性』2024年10月19日アクセス)とあり、ブラジルとその他小規模農園を抱えるコーヒー生産国が協力をを行い、供給量を調整しなければこの問題の解決は難しいと推察できる。環境問題はこれからすべてのコーヒー農園が影響を受ける問題であり、第1章でも触れた2050年問題を控えているからこそ、コーヒー市場のためにも改善が求められている。

第3項 エチオピアのコーヒー生産危機

ここまで発展途上国が抱える問題を述べてきたが、後発発展途上国に指定されているエチオピアは、さらに過酷な課題を抱えている。『Books and Café』の調査によれば、コーヒーは栽培期間が長く、収穫まで最短で3年、安定した収穫を得るには5年から7年の時間が必要である。その間、土壌の維持や改良が求められ、手間と費用がかかる (books and Café「エチオピアのコーヒーに何が起きているのか?」2024年10月19日アクセス)。エチオピアでは、経済的に困難な状況に加え、世界的なインフレの影響で肥料の入手が一層難しくなっている。

エチオピアのコーヒー農業は国の経済にとって重要な役割を果たしているが、その維持には多くの課題が伴う。特に、コーヒーの栽培には適切な気候条件と肥沃な土壌が必要であり、これらを維持するためには持続的な投資が不可欠である。しかし、農家は資金不足に悩まされており、必要な肥料や農業機械を購入することが困難な状況にある。さらに、気候変動による降雨パターンの不規則化は、コーヒーの収穫量を不安定にする要因となっている。

この問題に対処するため、『Books and Café』の調査によると、エチオピアではユーカリの栽培が始まっている。ユーカリは成長が早く、市場価値も高いが、大量の水分を消費するため、水資源の枯渇や周辺環境への悪影響を引き起こす可能性

がある。この結果、コーヒー農家の人口が減少し、環境の変化がコーヒー栽培に大きな影響を及ぼすことが懸念される (books and Café「エチオピアのコーヒーに何が起きているのか?」2024年10月19日アクセス)。ユーカリの栽培は短期的には経済的利益をもたらすかもしれないが、長期的には環境への負荷が大きく、持続可能な農業の実現には慎重な計画と管理が求められる (books and Café「エチオピアのコーヒーに何が起きているのか?」2024年10月19日アクセス)。エチオピア政府や国際援助機関は、コーヒー農家を支援するためのプログラムを展開し、持続可能な農業技術の導入や資金援助を行っているが、これらの取り組みが行き渡るには多くの時間と協力が必要である (books and Café「エチオピアのコーヒーに何が起きているのか?」2024年10月19日アクセス)。

第3節 上位5カ国以外でも問題のあるコーヒー豆生産

前節まで上位5カ国に絞って論じたが、上位5カ国以外にも多くのコーヒー生産国が存在する。本節では、現状劣悪な取引、生産環境下に置かれているその他のコーヒー生産国の理解を深め、平等な取引の必要性を論じる。

第1項 後発発展途上国、東ティモールの劣悪な労働環境

本章第1節で説明した後発発展途上国の中には東ティモールという国が含まれる。東ティモールは東南アジアに位置しており、コーヒーベルトの中心に位置している地の利を活かしてコーヒーの生産が盛んに行われている。その東ティモールの生産環境を、京都大学地域研究統合情報センターに属する阿部健一が行った、東ティモールのコーヒー栽培結果報告書を元に考察していく。はじめに、東ティモール自体の社会経済状況としては、「出生数の平均は、6.2人と高い一方社会経済状

況を反映する幼児死亡率も高く、3歳までに、男子の11.0%(15人)、女子14.4%(16人)が死亡している。死亡原因の多くが栄養失調もしくは病気で、特定できた中でははしかとマラリアが多かった。」(阿部 2007:218)とある。また、現地には医者はおらず、看護師のみの診療所しかないと記されており、病気対応に対しての脆弱性が否めない。

阿部によると、東ティモールは標高が高く、コーヒーの栽培には適している地域ではあるが、その他の作物に関しては栽培が難しく、自給自足は困難な地域であるという。コーヒー畑も家から一番近い距離で徒歩40分の距離に位置しており、人によって3時間かかる距離に位置している場合もある(阿部 2007:218)。

加えて問題として挙げられることが、「小農によるプランテーション栽培」(阿部 2007:220)であることだ。前節でもプランテーション栽培について触れたが、プランテーション栽培とは、他国に輸出するために行う農業のことである。そのため、自国で消費する作物ではない。このことにつ

いて阿部は「自給用の作物を栽培することもほとんどなく、コーヒーを販売して得た現金で、主食であるトウモロコシや米を購入している。」(阿部 2007:220)としている。

このことから、東ティモールは1つの問題に限らず、病気に罹りやすく治療の手段も少ない衛生面、十分な食事が採れず、他国から買う事も、自国で生産することも難しい経済難、加えて、命綱であるコーヒー栽培も農園までの距離が遠く、利便性に欠ける労働環境。このような劣悪な環境下でコーヒー栽培を行っている現実が存在している。

第2項 不平等な流通の現状

コーヒー豆を生産した後の輸出にも不平等な現実がある。本項では生産者の利益率について触れていく。コーヒーを一杯購入した際、生産者に入る利益は1~3%程度と言われている(自然電力株式会社「コーヒーを飲む時に考えてみよう その一杯の背景にある熱帯林の消失・農家の貧困と



図表8 キリマンジャロにおけるコーヒー豆流通ルート (プロマーコンサルティング 2010:82)

SDGs」2024年8月14日アクセス)。コンビニでコーヒーを購入した場合、約120円であることから、生産者に入る金額は1.2~1.5円程度であると考えられる。この金額は、コーヒーを生産する農家の労働と努力に対する対価としては非常に少ないといえる。

では、なぜ生産者に入る金額がこれほど少ないのか。その理由の一つは、商品になるまでの流通ルートにかかる手数料である。農林水産省補助事業の調査研究事業であるプロマーコンサルティングによると、商品になるまでの流通ルートの複雑性が関係している(図表8)。

この図表はキリマンジャロ州におけるコーヒーの流通経路であり、本項ではこの取引の1例としてタンザニアのキリマンジャロ州を挙げる。この流通経路を取り締まっているのが、キリマンジャロ先住民協同組合連合会(Kilimanjaro Native Cooperative Union: KNCU)である(プロマーコンサルティング 2010:82)。プロマーコンサルティングが提示したデータでは、「2,163Tsh/kg(約1.6米ドル/kg)で落札された生豆価格のうち、約半分にあたる1,078Tsh/kg(約0.8米ドル/kg)が必要経費として差し引かれ、生産者への支払額は1,085Tsh/kg(約0.8米ドル/kg)であった。差引額のうち47%は輸送費と保険費用だが、単協と協同組合連合会の手数料が23%を占めている。」(プロマーコンサルティング 2010:82)と記されており、必要経費に加えて、手数料としてかなり大きい金額が差し引かれていることが分かる。この現状からキリマンジャロでは、キリマンジャロ先住民協同組合連合会に不満を持った32単協が集まり、新たな共同組合としてG32⁵を設立したという(プロマーコンサルティ

ング 2010:83)。

さらに、コーヒー業界の実情を示す事例として、自家焙煎のコーヒー屋を営む川野優馬によると、1杯500円の特別に美味しいコーヒーを買った際でも、生産者に入る金額は6円程度であるという(川野優馬「1杯のコーヒーから何円が生産者に渡っているのか、解説。」2024年10月20日アクセス)。一見少ない金額に見えるが、川野は「まずコーヒーの消費国である日本と、生産国であるアフリカや中南米は物価が違います。エチオピアの平均月収は15,000円くらい。さらには都市部と農村部の暮らしにも大きな違いがあり、農村部では月収はもっと少なく自給自足に近い形で食料は自分たちでつくって暮らしています。」「木の本数や収穫量が少なくても、物価から考えたら、安すぎるとは言いきれないと思います。」(川野優馬「1杯のコーヒーから何円が生産者に渡っているのか、解説。」2024年10月20日アクセス)と語っている。これを考慮すると、生産者が受け取る金額は生活ができないほどではないが、貧困から抜け出すための経済力を得るには至らないことが分かる。あくまで現状維持を行う上での最低賃金を受け取っているのがコーヒー豆農園の現状である。

第3章 フェアトレードと持続可能なコーヒー産業

本章では、これまでのコーヒー産業の問題点を踏まえ、それに対する具体的な取り組みや、今後の展望について触れ、世界的に注目されているフェアトレードの推進や、持続可能な開発目標(SDGs)に基づく取り組みを中心に深掘りする。これらの活動は、コーヒー生産国の労働環境や経

5. G32とは、各単協が独自に銀行からの借入を行い、それを運営資金としている協同組合(プロマーコンサルティング 2010:83)。「CPUの導入やフェアトレード、有機認証の取得も積極的におこなっている。CPUはすでに3単協で整備されており、そのうちの1単協はCupof Excellenceというコーヒーコンテストで2位を獲得している。」(プロマーコンサルティング 2010:83)。

済的不平等の解決をする上で重要な役割を担っている。

本章では、フェアトレード制度の意義と課題を検討し、さらにSDGsがコーヒー豆生産国の労働環境改善にどう貢献しているか具体例を挙げて説明する。

第1節 SDGs,フェアトレードの概要と歴史

第1項 SDGsとは

外務省によると、「2001年に策定されたミレニアム開発目標（MDGs）後継として、2015年9月の国連サミットで加盟国の全会一致で採択された『持続可能な開発のための2030アジェンダ』に記載された、2030年までに持続可能でよりよい世界を目指す国際目標」と定義されている（外務省「SDGsとは？」2024年11月3日アクセス）。SDGsとはSustainable Development Goalsの略称であり、日本語にすると持続可能な開発目標になる。SDGsは、17のゴールと169のターゲットで構成されており、経済・社会・環境といったあらゆる側面において、持続可能な未来の実現を目指している。その内容は、貧困撲滅やジェンダー平等、気

候変動対策など、社会的な課題から環境問題に至るまで幅広くカバーされている（図表9）。

第2項 フェアトレードとは

フェアトレードジャパン公式サイトによると、「フェアトレードとは直訳すると『公平・公正な貿易』。つまり、開発途上国の原料や製品を適正な価格で継続的に購入することにより、立場の弱い開発途上国の生産者や労働者の生活改善と自立を目指す『貿易のしくみ』（FAIR TRADE JAPAN「フェアトレードとは」2024年11月3日アクセス）と定義されている。主に途上国の生産物に対して行われている取り組みであり、コーヒー以外にも、バナナやチョコレート、紅茶に対して行われている。フェアトレードの商品には、国際フェアトレード認証ラベルが付いており、国際フェアトレードラベル機構（Fairtrade International）が定めた基準が守られている証明になっている（FAIR TRADE JAPAN「フェアトレードとは」2024年11月3日アクセス）。

フェアトレードの仕組みは、一般的な取引とは異なり、「経済」「環境」「社会」の3つの側面に

持続可能な開発目標(SDGs)



図表9 持続可能な開発目標（SDGs）外務省「SDGsとは？」2024年11月3日アクセス

における包括的な基準に基づいている (SDGs CONNECT「フェアトレードの仕組みとは? - 背景にある4つの問題も解説」2024年11月3日アクセス)。

以下はSDGs CONNECTが提示した、3つの共通基準である。

経済的基準

- ・フェアトレード最低価格の保証
- ・フェアトレードプレミアム(輸入時の品物代金とは別に設けられている、地域経済的・社会的・環境的開発のために使われる資金)の支払い
- ・長期的な取引の促進
- ・必要に応じた前払いの保証 など

環境的基準

- ・安全な労働環境
- ・民主的な運営
- ・差別の禁止
- ・児童労働、強制労働の禁止 など

社会的基準

- ・農薬、薬品の使用削減と適正使用
 - ・有機栽培の奨励
 - ・土壌、水源、生物多様性の保全
 - ・遺伝子組み換え品の禁止 など
- (SDGs CONNECT「フェアトレードの仕組みとは? - 背景にある4つの問題も解説」2024年11月3日アクセス)。

これらの基準に基づくフェアトレードは、単なる価格保証にとどまらず、安全な労働環境や環境保護にも配慮した支援を提供する点が特徴である。これにより、生産者が自立し、持続的な経済成長を実現できるようサポートする枠組みが整えられている。

また、フェアトレードはSDGsの活動の一環と

して位置づけられており、特に貧困の削減(ゴール1)、働きがいのある人間らしい仕事(ゴール8)、持続可能な消費と生産(ゴール12)などの達成に貢献している。フェアトレードの取り組みは、短期的な利益の向上だけでなく、長期的な社会的・経済的安定をもたらすこと、生産者が公正な対価を得て持続可能な暮らしを実現できる環境を提供することを目的としている(SDGs CONNECT「フェアトレードの仕組みとは? - 背景にある4つの問題も解説」2024年11月3日アクセス)。

第3項 フェアトレードの拡大

渡辺龍也の調査によると、フェアトレードの認知率は2012年から2022年の10年間で13.6%増加している。2012年の認知率は25.7%(15~69歳の男女1079人対象)だったのに対し、2022年には39.3%(15~79歳の男女1039人対象)に達した。このような認知度の向上に伴い、世界的なフェアトレード認証生産者組織の数も増加傾向にある(渡辺 2021:103)。

フェアトレードインターナショナルの調査によると、2017年の認証生産者組織は1,569組織であったのに対し、2021年には1,910組織まで増加している(FAIR TRADE INTERNATIONAL「フェアトレードの広がり」と効果モニタリングレポート 第14版」2024年11月12日アクセス)。この期間中にフェアトレード商品の取引によって、生産者に支払われたフェアトレードプレミアム(奨励金)は261.8億円に上る。これにより特に小規模生産者組織は恩恵を受け、具体的には22%の農家が経済的な恩恵を受け、農具の購入や支払いに利用できる金額が増加した(FAIR TRADE INTERNATIONAL「フェアトレードの広がり」と効果モニタリングレポート 第14版」2024年11月12日アクセス)。加えて、フェアトレードプレミアムの用途については、68%が教育、医療、住宅、

金融サービスなどの社会インフラに投資されており、発展途上国の衛生問題や教育問題の改善に大きく貢献している（FAIR TRADE INTERNATIONAL「フェアトレードの広がりとは効果モニタリングレポート 第14版」2024年11月12日アクセス）。

このフェアトレードプレミアムの具体的な使用例として、コスタリカを例に挙げる。武田淳によると、2017年にコスタリカのコーペアグリ協同組合には約5,600万円のプレミアムが入ったという。その資金の使用用途が、①河川改修と②野生動物の保護施設の建設であった。①は、河川の氾濫によるコーヒー農園への被害削減、②はコスタリカのアグロフォレストリー化が関係している。アグロフォレストリーとは、農園自体を1つの森林のように作り上げ、環境保護と農園の2つの役割を与えることである。その中で野生動物が増加をし、コーヒー栽培に影響を及ぼすと考えられたことから、そのケアへの費用として割かれたとされている（武田 2023:27）。

このような事例からフェアトレードプレミアムは、収入減少に対してのアプローチに加えて、環境保護という観点から見ても有効的に働いていることが推察できる。

第2節 フェアトレードがもたらす具体的な効果 第1項 コーヒー農園における変化

コーヒーのフェアトレードが始まりは1990年代初頭であり、THE KENY PRESSによると、CEPCO（オアハカ州立コーヒー製造者組合）とオランダの輸入業者がきっかけになった。現在ではメキシコを代表するフェアトレード生産者団体であり、スターバックスなど大手コーヒー企業から支援を受け活動を行っている（THE KENY PRESS「コーヒー豆のフェアトレードの現状と課題-貧困と搾取の問題は解決できていない-」2024年11月19日アクセス）。

前節第3項で論じたフェアトレードの拡大であるが、コーヒー農園はこの影響を大きく受けている。フェアトレードインターナショナルの調査から、フェアトレード農家全体のうちコーヒー豆農家は47%を占めており、約半分の農家がコーヒーを栽培していることが分かる。また、フェアトレードプレミアムの全額のうち、認証コーヒーの販売から41%の金額が支払われている（FAIR TRADE INTERNATIONAL「フェアトレードの広がりとは効果モニタリングレポート 第14版」2024年11月12日アクセス）。

フェアトレード認証産品としてコーヒー豆はバナナについて2位の生産数を誇り、2021年には約92万トンのフェアトレード認証コーヒー豆が生産された。その生産面積も広く、1,153,327ヘクタール（東京都全域約5.3個分）という広さで認証コーヒー豆が生産されている（FAIR TRADE INTERNATIONAL「フェアトレードの広がりとは効果モニタリングレポート 第14版」2024年11月12日アクセス）。

そして、フェアトレード認証農家が増えることによって環境問題の改善も見込めるとされている。第3章第1節第1項でSDGsについて論じたが、その中には環境保全に関する開発目標がある。通常のコーヒー栽培の例として、斎藤コーヒー株式会社によると「持続可能でない農業方法が用いられることがあり、これにより環境に悪影響を与えることがあります。例えば、過剰な農薬の使用や水資源の乱用が考えられます。」（斎藤コーヒー株式会社「フェアトレードコーヒーとは？通常のコーヒーとの比較を徹底解説」2024年11月19日アクセス）とされている。

それに対し、フェアトレード認証農家は持続可能な農業方法の導入が義務付けられており、土壌の健康維持、森林保護、水質保全などが求められる。この規制により、コーヒー生産における環境への負荷を軽減し、長期的な環境改善を支える基

盤を作っている。

第2項 実際に変化が起きたコーヒー農園

フェアトレードによって変化が起きた農園の例として、ブラジル・ミナスジェライス州でコーヒー農園を営み、現在は中南米生産者ネットワーク団体CLAC（フェアトレード・インターナショナルメンバー組織）のマネージャーを務めるパウロ・フェレイラ・ジュニアの農園を取り上げる。

パウロがコーヒー農園を手伝い始めたのは16歳の時であり、この時は彼の父が所有するコーヒー農園を手伝っていた。その後22歳で生産者組織に加入し、フェアトレードのコーヒー栽培を開始した（Do well by doing good「ブラジルのコーヒー農家を一変させた、フェアトレードとの出会い【前編】」2024年11月19日アクセス）。

パウロがフェアトレードコーヒー栽培を始めるまでの間、彼の父の農園は経済的に困窮しており、農地を手放す判断を余儀なくされていた。しかし、パウロは大学でフェアトレードの概念について学んだところ、「プロフェッショナルとして知識をつければビジネスを展開できる。」（Do well by doing good「ブラジルのコーヒー農家を一変させた、フェアトレードとの出会い【前編】」2024年11月19日アクセス）と気が付き、組合ミーティングへの参加や具体的な農法、考え方を学んだ。

その中で特に苦勞をした点は、30年間農業を行ってきた父の価値観をリセットすることだという。パウロは「これまで受け継がれてきた農法を頭から取り払って、新しい栽培法に切り替えることに、苦勞する仲間の農家も少なくありません。新たなチャレンジがうまくいかず、最終的に農地を手放すケースもあるのです。」（Do well by doing good「ブラジルのコーヒー農家を一変させた、フェアトレードとの出会い【前編】」2024年11月19日アクセス）と語っており、変化を起こすにはリスクを伴うことが分かる。

その後、パウロの農園では化学肥料の使用を中断し、環境に優しい肥料を使った栽培法に変更をした。それにより農業の考え方が変わり、コーヒーと一緒にフルーツや野菜も同時に育てる方法を知った。また、「シェードツリー（日影樹）を植樹することでコーヒー豆の品質や収穫量がアップ。フェアトレード組合のトレーニングで最新の知識を仕入れることができ、ほかの農家との情報共有も活発におこなうようになりました。」（Do well by doing good「ブラジルのコーヒー農家を一変させた、フェアトレードとの出会い【前編】」2024年11月19日アクセス）と記されていることから、他作物の栽培によってコーヒーにも良好な環境が築けていることが推察できる。

そして、フェアトレードに参加したことによって買い取り額にも変化がある。以前は1ポンド1ドル以下であった買い取り額が、1ドル20セント以上にアップしたという。これによって農園の借金の返済も終了し、設備投資にまで資金を回せる好循環が実現した（Do well by doing good「ブラジルのコーヒー農家を一変させた、フェアトレードとの出会い【前編】」2024年11月19日アクセス）。

以上のことから、経営難に悩んでいた農園であっても公平な取引を行ったことによって、受け取れる収入が増加したことに加えて、環境に優しい栽培が可能になったことが分かる。

第3節 フェアトレードの課題と限界

ここまでフェアトレードのメリットを多く挙げ、フェアトレードによって起こる好循環を説明してきた。しかし、すべてのコーヒー農園がフェアトレード取引をしていない現在があることから、課題も残っている事実がある。

フェアトレードが抱える1番の課題は、商品の販売価格だ。前節での内容にもあるが、フェアトレード認証農家は通常買い取り額よりも多くの資

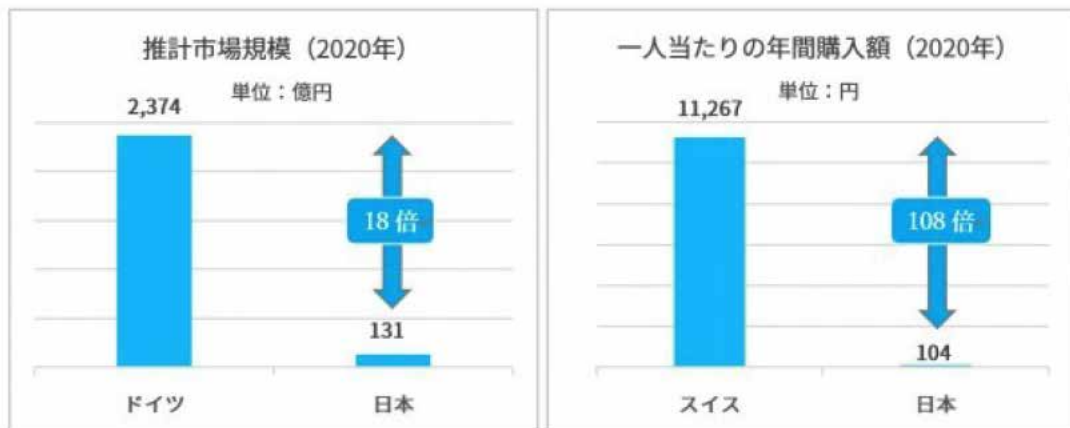
金を貰い、環境保護を重視した栽培を行っている。買い取り額が高い店頭で並ぶ金額も通常の買い取り額のコーヒー豆よりも高くなる傾向がある。協和キリン株式会社には「途上国の生産者や労働者と適切な額で取引することではあるが、消費者の立場ではメリットばかりとは限らない。製品の価格設定には限界があり、同ジャンルの他商品と比べると割高になる」（協和キリン株式会社「【解説記事】フェアトレードの目的と3つの問題点を解説」2024年11月19日）と記されている。

実際にUCCコーヒーのオンラインストアで確認してみるとその差が分かる。UCCコーヒーの代表的な豆であるUCCゴールドスペシャルブレンドの値段は250g+20g増量で970円であるのに対し、UCC フェアトレードキリマンジャロコーヒーの値段は180gで972円と書かれている。約90g差があるのに対して、値段がほとんど同じであることから、通常取引のコーヒー豆よりも高額で取引されていることが推察できる（UCCオンラインストア「【数量限定】UCC ゴールドスペシャル 炒り豆 スペシャルブレンド 250g+20g 増量（豆）」2024年12月8日アクセス）（UCCオンラインストア「フェアトレードキリマンジャロコーヒー 180g（豆）」2024年12月8日アクセス）。

実際にスーパーにこの2つの商品が並んでいた場合、フェアトレードの認知度が上がっているとしても、積極的にフェアトレードのコーヒー豆を購入する人が多いとは考えにくい。例として日本を挙げて推察する。

図表10から分かる通り、日本におけるフェアトレードの市場規模と年間購入額は多いとは言えない。理由の1つとして挙げられることは、購入している商品がフェアトレード商品であるか判断が難しい点である。買い物を行う際、飲食店でコーヒーを注文する際にそのコーヒーがフェアトレードされたか気にしている人はこのデータから少ないと推察できる。本稿でスターバックスはフェアトレードを行っている企業の代表例として挙げたが、実際にスターバックスを使用している顧客の中で、フェアトレードを理由にして使用している人は少ない。

図表11がLINE株式会社によるスターバックスの好きなどころという調査である。この内容にはフェアトレードや環境保護、コーヒー農園の件はなく、スターバックス自体の評価だと分かる。この件を例に、今の日本ではフェアトレードかどうかを気にするどころか、その商品がフェアトレードによって輸入されたものであるかを知らない人



図表10 フェアトレードコーヒーの市場規模と年間購入額 (FAIR TRADE JAPAN 「【2021年フェアトレード国内市場規模発表】国内フェアトレード市場規模158億円、昨年比120%と急拡大」2024年11月3日アクセス)

スターバックスの好きなところは？

[全体] TOP 10

1	ドリンクがおいしい	43.7%
2	限定・新作のメニューが充実している	29.5%
3	おしゃれ	29.0%
4	ドリンクメニューが充実している	26.6%
5	店の雰囲気がいい	23.4%
6	店がきれい・清潔	21.1%
7	ドリンクがカスタマイズできる	20.9%
8	店員 / バ리스タの接客がいい	18.1%
9	居心地がいい	17.0%
10	本格的なコーヒーが飲める	16.5%

LINEリサーチ調べ (n=4,027)
 ※複数回答
 ※複数コース・店舗をスターバックス店舗に回答した人

[年代別] TOP 5

10代 (n=296)			20代 (n=912)		
1	ドリンクがおいしい	62.2%	1	ドリンクがおいしい	54.4%
2	限定・新作のメニューが充実している	46.0%	2	限定・新作のメニューが充実している	43.0%
3	おしゃれ	43.9%	3	おしゃれ	33.8%
4	ドリンクメニューが充実している	36.9%	4	ドリンクメニューが充実している	32.8%
5	ドリンクがカスタマイズできる	35.0%	5	ドリンクがカスタマイズできる	28.3%
30代 (n=902)			40代 (n=839)		
1	ドリンクがおいしい	45.3%	1	ドリンクがおいしい	39.2%
2	限定・新作のメニューが充実している	34.7%	2	おしゃれ	29.1%
3	おしゃれ	31.4%	3	限定・新作のメニューが充実している	23.6%
4	ドリンクメニューが充実している	26.2%	4	店の雰囲気がいい	23.5%
5	店の雰囲気がいい	25.3%	5	ドリンクメニューが充実している	22.8%
50代 (n=827)			60代 (n=415)		
1	ドリンクがおいしい	36.5%	1	ドリンクがおいしい	32.2%
2	ドリンクメニューが充実している	24.7%	2	本格的なコーヒーが飲める	22.3%
3	おしゃれ	21.6%	3	ドリンクメニューが充実している	20.5%
4	本格的なコーヒーが飲める	21.3%	4	店がきれい・清潔	20.2%
5	限定・新作のメニューが充実している	20.2%	5	お店の立地・場所が便利	15.8%

LINEリサーチ調べ
 ※複数回答
 ※複数コース・店舗をスターバックス店舗に回答した人
 ※7件以上の回答がない店舗を除外

図表11 スターバックスの好きなところ (LINE株式会社「LINEリサーチ、全国の男女を対象にスターバックスに関する調査を実施」2024年11月19日アクセス)

が多いと推察できる。

このことから、フェアトレードの普及率を高めるには、小売店や飲食店が商品の原産地を消費者に分かるように宣伝を行うこと、消費者自身がコーヒー豆の農園で何が起きているか知識をつけることが求められる。

終章 結論と今後の課題

本稿では、コーヒー豆生産国における経済状況、労働環境を知り、コーヒー豆から各国の歴史や文化、農園の現状を紐解いてきた。

第1章ではコーヒー豆生産上位5カ国を対象に、コーヒーにまつわる文化や歴史を論じた。コーヒー発祥の地であるエチオピアでは、宗教と基づいたカルディの伝説から始まり、エチオピア特有のコーヒーの振る舞い方「コーヒー・セレモニー」など、味だけではない文化を提示した。コーヒー豆生産量1位を誇るブラジルは、コーヒーが持ち込まれた1727年から生産を続け、1850年から生産量1位となり、コーヒーの普及に尽力してきた。現代でもプランテーション化の加速によって生産に対する進化を続けているが、それ故に地球温暖化の影響によってコーヒーの木がさび病や虫の影響を受け、収穫量が大きく低下する可能性がある2050年問題に対して、1番影響のある国であると指摘できよう（キーコーヒー株式会社「コーヒーの2050年問題」2024年8月14日アクセス）。ベトナムは、ロブスタ種の生産量で世界2位を誇っており、「カフェ・フィン」を利用したベトナムならではのコーヒーがあることが分かる。対してコロンビアはアラビカ種の生産に力を入れており、コーヒー畑は世界文化遺産に登録、豆の品質にこだわった高級豆の栽培を行っているこだわりを持った地域である。インドネシアも、アラビカ種の栽培に力を入れており、栽培される地域によって豆の名前が大きく変わる。

第2章では第1章で論じたコーヒー豆生産を

行っている国の労働環境の現実を論じた。本稿で述べているコーヒー豆生産国は全て発展途上国であり、エチオピアに関しては後発発展途上国という途上国の中でも更に貧困な国である。また、1次産業に依存した産業に加えて、歴史的背景からモノカルチャー経済という単一栽培をメインに行う産業形態であることから、常にリスクと隣り合わせて栽培を行っているといえるのではないだろうか。加えて、コロンビアで生産された豆のコーヒー1杯分の値段は大体0.02ドルであり、その原因は大量生産大量取引を行うブラジルによって供給量が多くなることから値段が下がってしまうという。

このことから、ブラジルという1つの国の力でコーヒーの市場が大きく揺らぐことがある現実がある。また、エチオピアと共通する後発発展途上国である東ティモールのコーヒー豆農園についても論じた。東ティモールは「3歳までに、男子の11.0%(15人)、女子14.4%(16人)が死亡している。」(阿部 2007:218)というような劣悪な環境で日々生活のためにコーヒー豆の栽培を低賃金で行っていると述べた。他にも、キリマンジャロ州におけるコーヒー豆流通の際、業者に中抜きをされ生産者には少ない金額しか残らないと知った。

第3章では、ここまで論じた発展途上国に対して、SDGsの目標を元に労働環境の改善や、労働量に見合った取引の見直しが行われていると述べた。フェアトレードの普及も毎年拡大しており、フェアトレードの認証農家は2021年には1,910組織まで増加している。認証農家はフェアトレードプレミアムという形で通常の取引以上の金額を受け取ることで、教育、医療、環境の改善に使用できる金額が増え、労働環境の改善に大きく役立っていると学んだ。また、フェアトレードの認証農家は環境に配慮した形で栽培を行うことから、2050年問題として危惧されている地球温暖化に対してもアプローチを行い、農薬の使用を控えるこ

とや、自然保護の観点から農園と森林を一体化させた新しい形の農園の作成など、労働環境の改善と伴って、自然環境に対しても改善が出来ている。しかし、フェアトレードの課題として、商品の値段がその分高騰し、通常の農園で栽培されたコーヒー豆よりも高い値段になってしまうこと、日本において現在の販売形式だと消費者自身がフェアトレード商品を買うことで生産者に対してどのような効果があるのかが分かりにくい、意識してフェアトレード商品を購入しないことが挙げられる。

これらのことから、長い歴史と共に現代まで嗜まれてきたコーヒーには発展途上で低い賃金の中で大量生産を余儀なくされている現実と、フェアトレード認証農家の増加によって年々改善が行われている現実があると明らかにしてきた。これらの点から、これからの未来でもコーヒーを飲み続けるためには消費者自身がフェアトレード商品への理解を深めることが重要であると考えられる。確かに、低価格で大容量のコーヒー豆は魅力的であり、多くの人がそのようなコーヒー豆を購入している。しかし、このまま消費者が変わらなければ、生産国はより多くのコーヒー豆を生産するため農地を拡大し、環境を変えてしまう。2050年問題が迫っている現在において、現状を変えなければ生産者も消費者も共倒れになってしまうのではないだろうか。これから先もコーヒーを飲み続けるためにも、フェアトレード価格で購入することが普通であると意識が変わることによって、2050年以降も現在のようにコーヒーを全世界で楽しむ未来になると考えられる。

コーヒー豆を購入するうえで重要なことは、安く手に入れることではなく、生産者と消費者どちらも良好な関係で取引が行える、未来のある取引である。

引用・参考文献(アルファベット順)

- ・阿部健一、2007、「グローバル化時代の環境保全型農業: 東ティモールのコーヒー栽培」『熱帯農林』51(5):216-223(10月29日アクセス、https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsta1957/51/5/51_5_216/_pdf/-char/ja)。
- ・朝日新聞、2024年8月29日更新、「開発途上国とは? 定義や一覧、解決すべき問題や日本の支援事例を解説」(2024年10月11日アクセス、<https://www.asahi.com/sdgs/article/15404649#h2sm0dmhwdc15w54nny4cqi0mfhojd>)。
- ・books and Café、2024年7月8日更新、「エチオピアのコーヒーに何が起きているのか?」(2024年10月19日アクセス、<https://bookandcafe.net/archives/5973>)。
- ・珈琲豆専門店-YABU COFFEE、2021年8月29日更新、「ベトナム アラビカコンテスト1位」(2024年10月4日アクセス、https://www.yabucoffee.com/2021/08/29/blog-23/#:~:text=%E3%83%99%E3%83%88%E3%83%8A%E3%83%A0%E3%81%A7%E3%81%AE%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%92%E3%83%BC%E3%81%AE.%E7%94%A3%E5%9C%B0%E3%81%A8%E3%81%AA%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82))。
- ・珈琲タイム、2017年更新、「カフェ・フィン」(2024年10月4日アクセス、<https://coffee-effect.com/a03-02-005coffeefin.html>)。
- ・コーヒーで世界を救う、2017年更新、「植民地の背景」(2024年10月11日アクセス、https://contest.japias.jp/tqj20/200293R/2_1.html)。
- ・Do well by doing good、2022年12月9日更新、「ブラジルのコーヒー農家を一変させた、フェアトレードとの出会い【前編】」(2024年11月19日アクセス、<https://dowellbydoinggood.jp/contents/voice/583/>)。
- ・東日本コーヒー商工組合、2020年7月29日更新、「エ

- チオピアコーヒーの特長とは? 伝統的なコーヒーセレモニーも紹介」(2024年9月3日アクセス、https://www.ejcra.org/column/ca_69.html#:~:text=%E3%82%A8%E3%83%81%E3%82%AA%E3%83%94%E3%82%A2%E5%BC%8F%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%92%E3%83%BC%E3%81%AE%E6%B7%B9%E3%82%8C%E6%96%B9,%E3%82%A8%E3%83%81%E3%82%AA%E3%83%94%E3%82%A2%E5%BC%8F%E3%81%AE&text=%E3%81%BE)。
- ・FAIR TRADE INTERNATIONAL、2022、「フェアトレードの広がり」と効果モニタリングレポート 第14版」(2024年11月12日アクセス、https://www.fairtrade-jp.org/material/pdf/Fairtrade-monitoring-report-overview-14th_web.pdf)。
 - ・FAIR TRADE JAPAN、2022年5月11日更新、「【2021年フェアトレード国内市場規模発表】国内フェアトレード市場規模158億円、昨年比120%と急拡大」(2024年11月3日アクセス、<https://www.fairtrade-jp.org/news-detail.php?id=109>)。
 - ・FAIR TRADE JAPAN、2024更新、「フェアトレードとは」(2024年11月3日アクセス、https://www.fairtrade-jp.org/about_fairtrade/course.php)。
 - ・外務省、2024年5月29日更新、「ブラジル連邦共和国(Federative Republic of Brazil) 基礎データ」(2024年8月30日アクセス、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/brazil/data.html>)。
 - ・外務省、2006、「平成18年度外務省第三者評価」10(2024年10月11日アクセス、https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hyouka/kunibetu/gai/nougyo/pdfs/jk06_02.pdf)。
 - ・外務省、「SDGsとは?」(2024年11月3日アクセス、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/sdgs/about/index.html>)。
 - ・石原美奈子、2013、「コーヒーの意味と価値の変容-エチオピア南西部の事例-」『人類学研究所研究論集』1:150-180(2024年8月26日アクセス、<https://rci.nanzan-u.ac.jp/jinruiken/publication-new/item/ronshu1-07%20Ishihara.pdf>)。
 - ・岩切正介、1998、「コーヒーとカフェの起源と広がり-イスラム世界-」『横浜国立大学教育人間科学部紀要II.人文科学』1:23-44(2024年8月26日アクセス、<https://ndlsearch.ndl.go.jp/books/R000000025-I008220006345951>)。
 - ・LINE株式会社、2022年7月20日更新、「LINEリサーチ、全国の男女を対象にスターバックスに関する調査を実施」(2024年11月19日アクセス、<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000003901.000001594.html>)。
 - ・川野優馬、2020年10月20日更新、「1杯のコーヒーから何円が生産者に渡っているのか、解説。」(2024年10月20日アクセス、https://note.com/yuma_lightup/n/n7666349727e9)。
 - ・キーコーヒー株式会社、2024年2月21日更新、「コーヒーを知る」(2024年8月18日アクセス、<https://www.keycoffee.co.jp/story/culture/history/>)。
 - ・キーコーヒー株式会社、「コーヒーの2050年問題」(2024年8月14日アクセス、<https://www.keycoffee.co.jp/sustainable/2050.html>)。
 - ・キーコーヒー、2023年9月23日更新、「ベトナムコーヒーはどんな味? 特長やいれ方を解説」(2024年10月4日アクセス、<https://www.keycoffee.co.jp/shallwedrip/coffeeknowledge/about-vietnamese-coffee/>)。
 - ・小宮山涼一、2023、「モノカルチャーのリスク」『特集1 F 事故の教訓と課題』65(3):148(2024年10月11日アクセス、https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaesjb/65/3/65_148/_pdf)。
 - ・環境イノベーション情報機構「生物多様性(第16回)『一杯のコーヒーから考える生物多様性』」(2024年10月19日アクセス、<https://www.eic.or.jp/library/pickup/154/>)。
 - ・協和キリン株式会社「【解説記事】フェアトレードの目的と3つの問題点を解説」(2024年11月19日アクセス、<https://www.kyowakirin.co.jp/>)。

- stories/20220906-01/index.html)。
- ・松本安弘、COFFEE ROASTERY 101、2023年1月7日更新、「インドネシアで生産されているコーヒー豆の特徴とは」(2024年10月4日アクセス、<https://roastery101.com/news/732/>)。
 - ・プロマーコンサルティング、2010、「高収益農業研究 アフリカのコーヒー産業と日本の貿易・援助 - タンザニアとエチオピアのコーヒー産業及び輸出促進に対する支援策等 -」『平成22年度 農林水産省補助事業 途上国支援のための基礎的情報整備事業 (調査研究事業)』1-108 (2024年9月29日アクセス、http://www.promarconsulting.com/site/wp-content/uploads/files/Coffee_Final.pdf)。
 - ・佐藤孝、1972、「プランテーション作物」『熱帯農林』24:39 (2024年9月6日アクセス、https://www.jstage.jst.go.jp/article/ttf/0/24/0_39/_pdf/-char/ja)。
 - ・自然電力株式会社、2021年10月1日更新、「コーヒーを飲む時に考えてみよう その一杯の背景にある熱帯林の消失・農家の貧困とSDGs」(2024年8月14日アクセス、https://shizen-hatch.net/2020/10/20/loss_of_tropical_forests/)。
 - ・斎藤コーヒー株式会社、2023年5月19日更新、「フェアトレードコーヒーとは？ 通常のコーヒーとの比較を徹底解説」(2024年11月19日アクセス、https://www.saitou-coffee.co.jp/news-topics/topics/608/#:~:text=%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%92%E3%83%BC%E3%81%AF%E4%B8%96%E7%95%8C%E4%B8%AD%E3%81%A7,%E7%82%B9%E3%81%A7%E9%81%95%E3%81%84%E3%81%8C%E3%81%82%E3%82%8A%E3%81%BE%E3%81%99%E3%80%82))。
 - ・SDGs CONNECT、2022年9月21日更新「フェアトレードの仕組みとは？-背景にある4つの問題も解説」(2024年11月3日アクセス、<https://sdgs-connect.com/archives/50778#i>)。
 - ・白石和幸、東洋新聞、2019年8月3日更新「日本人が知らない『コーヒー』生産農家の悲哀」(2024年10月12日アクセス、<https://toyokeizai.net/articles/-/295507>)。
 - ・武田淳、2023、「『コーヒー2050年問題とフェアトレードの現在』 気候変動とコーヒー生産者の応答-今、生産現場で何が起きているのか-」『人間と環境』49(3):25-29 (2024年11月13日アクセス、https://jglobal.jst.go.jp/detail?JGLOBAL_ID=202302282718107918)。
 - ・THE KENY PRESS、2019年更新、「コーヒー豆のフェアトレードの現状と課題 - 貧困と搾取の問題は解決できていない -」(2024年11月19日アクセス、<https://keny.jp/coffee-fair-trade/>)。
 - ・田中優衣、2014、「コーヒー豆の持続的な生産に向けて」1-34 (2024年10月12日アクセス、<https://onumaseminar.com/assets/GraduationPapers/12th/tanaka.pdf>)。
 - ・大社珈琲、2020年7月10日更新、「インドネシアコーヒー豆の特徴 | 歴史・主な産地や豆の種類も」(2024年10月4日アクセス、<https://maruco.co.jp/taishacoffee/indonesia-coffee/>)。
 - ・UCCコーヒー、2023年12月7日更新、「コーヒー生産量世界一の『ブラジル』 - コーヒーベルト・コレクション -」(2024年9月6日アクセス、https://mystyle.ucc.co.jp/magazine/a_23941/#:~:text=%E3%83%96%E3%83%A9%E3%82%B8%E3%83%AB%E3%81%AE%E3%82%B3%E3%83%BC%E3%83%92%E3%83%BC%E3%81%AF%E3%80%811727.%E3%81%A8%E5%88%87%E3%82%8A%E6%9B%BF%E3%82%8F%E3%81%A3%E3%81%A6%E3%81%84%E3%81%8D%E3%81%BE%E3%81%97))。
 - ・UCCオンラインストア「【数量限定】UCC ゴールドスペシャル 炒り豆 スペシャルブレンド 250g+20g 増量(豆)」(2024年12月8日アクセス、https://store.ucc.co.jp/category/BRAND_2/GSP0600003.html)。

- ・UCCオンラインストア「フェアトレードキリマンジャロコーヒー 180g (豆)。」(2024年12月8日アクセス、https://store.ucc.co.jp/category/BRAND_33/SAI3301002.html?srsltid=AfmBOoqYAapYiXyhoMI5nzJYrjRclBrsrY9UqQ1rVni1pW_mal8SiVYv)。
- ・USDA、2023年12月、「Coffee: World Markets and Trade」2 (2024年10月4日アクセス、<https://downloads.usda.library.cornell.edu/usda-esmis/files/m900nt40f/wd377g27h/bk129x03v/coffee.pdf>)。
- ・ボランティアプラットフォーム、2024年更新、「プランテーション」(2024年10月11日アクセス、<https://volunteer-platform.org/words/others/plantation/>)。
- ・World bank group、2022年更新、「GNI per capita (constant LCU) - Japan」(2024年10月11日アクセス、<https://data.worldbank.org/indicator/NY.GNP.PCAP.KN?locations=JP>)。
- ・World Population Review、「Coffee Producing Countries 2024」(2024年8月26日アクセス、<https://worldpopulationreview.com/country-rankings/coffee-producing-countries>)。
- ・渡辺龍也、2021、「フェアトレードと倫理的消費(Ⅱ) —全国調査が明らかにするその動向—」『現代法学』40:95-144 (2024年11月12日アクセス、<https://repository.tku.ac.jp/dspace/bitstream/11150/11611/1/genhou40-05.pdf>)。
- ・全日本コーヒー協会、「コーヒーの基礎知識」(2024年8月14日アクセス、<https://coffee.ajca.or.jp/webmagazine/library/more/>)。